障害者、高齢者のコミュニケーション支援に関する研究
―知的障害者の日常生活支援ハンドブックの開発―

A Study on Communication Support for Elderly Persons and Persons with Disabilities
―Development of Handbook of Daily Life Support for Persons with Intellectual Disabilities―

大森清博　杉本義己　北川博巳
OMORI Kiyohiro, SUGIMOTO Yoshimi, KITAGAWA Hiroshi

キーワード：
知的障害者、日常生活、福祉機器、環境調整、ハンドブック

Keywords:
Persons with Intellectual Disabilities, Daily Life, Welfare Device, Environmental Control, Handbook

Abstract:
Under Services and Supports for Persons with Disabilities Act, it is desired that persons with disabilities can live independent daily or social lives according to their respective abilities and aptitudes. However, people on the fields of caring don't understand enough about specific assistive methods although various researches and case examples are available to the public. The purpose of this study is to develop a handbook of daily life support for persons for intellectual disabilities, and the handbook is targeted at their family and support persons.

In this year, in order to collect the support methods, we conduct a questionnaire survey which focuses on care homes for persons with intellectual disabilities, and an interview survey which focuses on parents who have children with intellectual disabilities. As a result, our handbook consists of 54 kinds of "ingenious idea of equipment choice and using", 45 kinds of "environmental control", and 46 kinds of "consideration of caregivers". Furthermore, 110 informative illustrations are newly drawn in order to release the handbook to the public.

1　はじめに

平成23年度版障害者白書[1)]によると、全国の知的障害児・者数は54.7万人であり、うち在宅者は41.9万人である。在宅者の多くは親や家族と同居し、一人暮らしや結婚して生活している人、あるいはグループホームで暮らしている人はごく一部である。これに対し、障害者自立支援法施行に伴い自立生活へ向けた支援が強く望まれている。知的障害者に対する支援方法や指導アプローチなどに関しては様々な研究成果や文献が公開されており、近年ではインターネットなどによる情報収集・発信も活発になっている。しかしながら、必ずしも当事者、家族、支援者がそれらの情報を活用しているとは言えず、また、支援現場で行われている工夫事例についても他の現場に向けて十分情報発信されているとは言えない。

本研究では、知的障害者の自立生活を支援することを目的として、「朝起きてから夜寝るまで」の日常生活の流れに着目して、既存の研究成果や文献、支援の現場での工夫事例などから、生活のどの部分でどのような支援方法があるのかを抽出、整理したハンドブックの制作を進めている。なお、ハンドブックをより広く活用してもらうためには読みやすさへの配慮など種々の工夫も想定されるため、今回は家族やその他の支援者が活用することを想定している。

本年度は、昨年度に整理した概略仕様設計を元にハンドブックのドラフト版を制作して、これをもとに知的障害者ケアホームへのアンケート調査と、知的障害者の子どもを持つ親に対する聞き取り調査を実施した。そして、継続して実施した文献調査と合わせて新たな支援の工夫事例を収集し、これらの調査結果を整理して「知的障害者の生活支援ハンドブック」を制作したので報告する。

2　調査１：知的障害者ケアホームを対象とするアンケート調査

2.1　概要

宝塚市内で知的障害者のケアホームを運営している「宝塚さざんか福祉会」に協力を依頼し、同福祉会の運営するケアホーム14施設を対象に、生活場面での支援状況の把握と工夫事例の収集を目的としてアンケート調査を行った。ケアホーム（共同生活介護）とは、障害程度区分が区分２以上に該当する身体障害者、知的障害者および精神障害者を対象に、共同生活を営むべき住居に入居している障害者につき、主として夜間において、共同生活住居において入浴、排泄および食事などの介護、調理、洗濯および掃除などの家事、生活などに関する相談および助言、就労先その他関係機関との連絡、その他の必要な日常生活上の世話を行うものである。同福祉会の運営するケアホームではそれぞれ３～７名の知的障害者が共同生活を営んでいる。

調査に際し、昨年度に整理した概略使用設計を元にハンドブックのドラフト版を制作した。これは10種類の生活場面で構成され、各生活場面をいくつかの行動手順で構成したものである。各行動手順において行われる支援として、昨年度の文献調査結果から得られた工夫事例を「機器の工夫」(36例)、「環境調整」(37例)、「人的な配慮、その他」(32例）に分類して整理した。

質問項目は、ドラフト版のそれぞれの工夫事例について利用者のうち何人に対し実践しているか、また、ドラフト版に挙がっていない支援の工夫がについては、自由筆記で回答してもらった。実施期間は2011年７月、14施設中13施設から回答を得た。

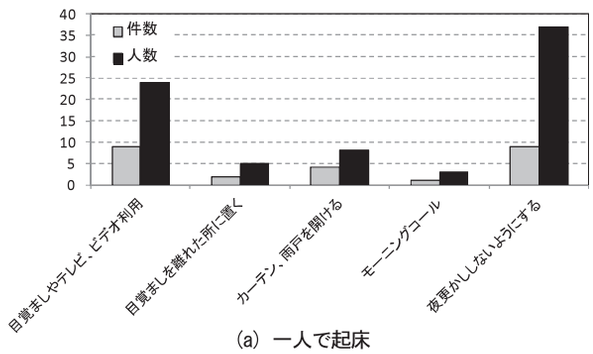
2.2　アンケート結果

各生活場面の行動手順において何らかの支援を実施しているケアホームの数を表１に示す。文献調査で工夫事例の多かった調理や歯磨き、入浴場面では実践しているものが少なかった。特に調理については、支援員が主として担当していて興味のある利用者ができる範囲で手伝うために工夫が少なかったと考えられる。また、他の歯磨きや入浴場面についても同様に支援員による直接的な介助が中心になっていたと考えられる。

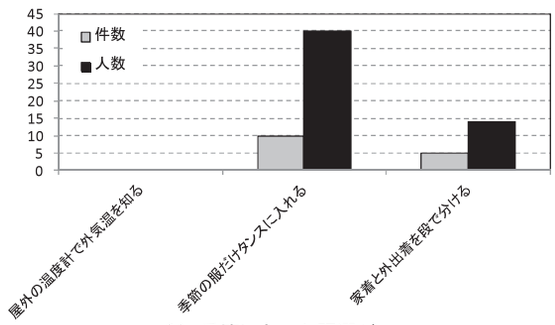
表１　各生活場面で支援を実施しているケアホームの数
Table 1　Number of care home where some supports are provided in each situation

生活場面	行動手順	件数
起床	一人で起床	12
	布団の片付け	8
着替え	季節にあった服選び	10
	着替え	0
	服の片付け	3
朝食	バランスの取れたメニューづくり	0
	食べたいメニューを選ぶ	0
	調理	3
	配膳	2
	食べる	11
	片付け	3
整容	歯磨き	4
	洗顔	5
	髪をとく	1
	ひげ剃り／化粧	0
排泄	トイレに向かうタイミング	3
	排泄／排尿	5
	紙や水の使いすぎ	3
洗濯	服の汚れの把握	0
	洗濯カゴに入れる	1
	天気の確認	0
	洗濯機の操作	3
	干す	1
	取り込む	0
	片付け	5
掃除	ほうき、掃除機の利用	0
	掃除の程度や範囲	6
夕食	（朝食と同様）	—
入浴	掃除、湯張り	0
	量や温度の確認	2
	脱衣	0
	つかる	0
	洗体、洗髪	2
	遊び過ぎない	0
	着衣	0
	お湯やガスの確認	0
就寝	タイミング	0
	ベッドメーク	0
	目覚ましのセット	0
	就寝	0

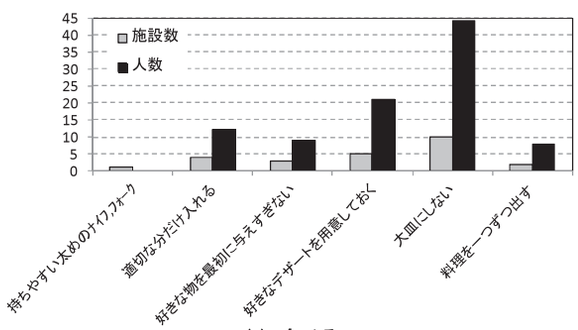
次に、支援を実施しているケアホームの多かった「一人で起床」「季節にあった服選び」「食べる」について、工夫事例別に実施している件数と利用者数



(a) 一人で起床



(b) 季節にあった服選び



(c) 食べる

図１　工夫事例別の実践件数と対象利用者数
Fig. 1　Number of care homes and users by ingenious idea of support

の詳細を図１に示す。個別の工夫事例では、「目覚ましやテレビ、ビデオを利用」「夜更かしをしないようにする」「季節の服だけタンスに入れる」「大皿にしない」といった日常的な機器の活用や環境調整、人的な配慮が多く実践されており、施設利用者の多くが支援を共有できるものが多かった。一方、今回の調査では福祉用具の活用はほとんど見られなかった。

一方、ドラフト版に挙げていなかった新たな支援の工夫事例として、次の３例を得られた。いずれの工夫事例も、利用者が自らしようとする事を制限することなく、食べ過ぎや使いすぎを防ぐという点が共通している。

・夕食時、白米をお代わりする人に限り、食べ過ぎないように２杯で１膳分になるようにする（食事場面「配膳」、人的な配慮）
・少量と言っても利用者一人ひとりが必要以上に洗剤を使うので、始めから５～６倍に薄めておく（食事場面「片付け」、機器の工夫）
・シャンプーを事前に２倍に薄めて使う（入浴場面「洗体・洗髪」、機器の工夫）

３　調査２：知的障害者の子どもを持つ親に対する聞き取り調査

3.1　概要

昨年度聞き取り調査に協力いただいた「宝塚市手をつなぐ育成会」と、神戸市東灘区で知的障害者の宿泊訓練や料理教室、地域交流といった活動を進めている「チャレンジひがしなだ」の２団体に協力を依頼し、第２章で制作したハンドブックドラフト版を元に新たな工夫事例の収集を目的として、知的障害者の子どもを持つ親に対し、聞き取り調査を行った。

本調査は各行動手順での支援の状況と工夫事例について、半構造化形式の設問を用いて直接面談により実施した。被験者は宝塚市手をつなぐ育成会会員３名、チャレンジひがしなだ会員２名、合計５名である。

3.2　聞き取り結果

ドラフト版に挙げていなかった新たな支援の工夫事例として、次の13例を得られた。

・携帯電話の目覚まし機能を利用する。最初の設定を支援者にしてもらい、セットは自分で行う（起床場面「一人で起床」、機器の工夫）
・レンジの時間設定が難しい場合「短めを繰り返し」という単純な操作で、必要な暖かさになるまで温めるようにする（朝食場面「調理」、機器の工夫）
・絵カード「少しずつよく噛んでゆっくり食べる」を用いる（朝食場面「食べる」、人的な配慮）
・一回に使う量が分かりやすいようにワンプッシュ式の洗剤を使う（朝食場面「片付け」、機器の工夫）
・茶碗用カゴ、マグカップ用棚と分けて、何をどこに片付けるのかを場所で覚えるようにする（朝食場面「片付け」、環境調整）
・流水が苦手なので、洗面器に浅く水を溜めて洗顔する（整容場面「洗顔」、機器の工夫）
・家族と一緒の外出時にはトイレの場所を決めて

から外出する（排泄場面「トイレに向かうタイミング」、人的な配慮）
・絵カード「晴れ、曇、傘（雨）」を使い当てはまるものに○を付けて分かりやすく伝える（洗濯場面「天気の確認」、人的な配慮）
・ピンチが10個位の小さいハンガーを使う（洗濯場面「干す」、機器の工夫）
・庭の草抜きの時、段ボールで白い枠を作って地面に置き、枠の中の草を抜くように伝える。草抜きの範囲を視覚的に分かりやすく伝える（掃除場面「掃除の程度や範囲」、機器の工夫）
・ゴミ箱の位置にこだわりがあって奥に押しやってしまうのでゴミ箱の置き場所を貼り紙で床に示す（掃除場面「掃除の程度や範囲」、環境調整）
・着替え用の下着とパジャマを入れるカゴにシンボルを貼っておくと自分で用意できる（入浴場面「着替えの用意と脱衣」、環境調整）
・布団カバーやマットに関して自分用の色を決めると自分で敷くときに選びやすくする（就寝場面「ベッドメーク」、人的な配慮）

また、上記の工夫事例と別に、聞き取り調査では各被験者の家庭における現状の課題についても抽出することができた。ドラフト版に挙げていない課題として以下の５点が得られた。

・融通が利かず、時間が無くても教えたとおり洗う（朝食場面「片付け」）
・家では問題無いが、外出時にトイレに行きたい事を言い出せない（排泄場面「トイレに向かうタイミング」）
・ちりとりを上手く使えない（掃除場面「ほうき、掃除機の利用」）
・ゴミの分別、特に燃えるゴミとプラスチックゴミの分別ができない（掃除場面「掃除の程度や範囲」）
・夜間にトイレに向かう際、静かに移動する事ができない（就寝場面「就寝」）

3.3　聞き取り調査後の意見交換

聞き取り調査後、ハンドブックの制作（詳細は次章）と並行して宝塚市手をつなぐ育成会会長以下４名と意見交換を実施し、修正した行動手順に対する支援の工夫事例や、聞き取り調査時に得られた課題に対する支援の工夫として、以下の７点が得られた。

・薬の量が微妙な場合、溶かして飲ませるときに残さないように十分に注意する（朝食場面「服薬」、人的な配慮）
・トイレのマークが嫌な場合、例えば赤は怖いがピンクなら大丈夫、といった場合があるので配慮する必要がある（排泄場面「トイレに向かうタイミング」、環境調整）
・ちり取りでゴミを集めるのが苦手な場合、最初はちり取り担当に専念する。また、入れやすい大きなゴミで練習する（掃除場面「ほうき、掃除機の利用」、人的な配慮）
・ゴミの分別が難しい場合、自分用のゴミ箱を用意して全部そこに捨てる事で、後で支援者が分別するときの負担が軽減される（掃除場面「掃除の程度や範囲」、機器の工夫）
・バスタブを洗うとき横に長いスポンジを使う事でこする回数が減って万遍なく掃除できる（入浴場面「掃除、湯張り」、機器の工夫）
・支援者が泡タイプの洗剤を掃除する範囲に吹き付けておく。泡を目印にすることでバスタブを万遍なく掃除できる。バスタブは汚れが見えにくく掃除する範囲が分かりにくいので、配慮が必要である（入浴場面「掃除、湯張り」、人的な配慮）
・常夜灯の無いホテルの場合、ユニットバスの照明を点けて少しだけドアを開けておくと、安心して眠ることができる（就寝場面「就寝」、環境調整）

４　ハンドブックの制作

4.1　概要

前述のドラフト版を元に学識者、宝塚市手をつなぐ育成会会員と意見交換を行い、支援の工夫事例を追加すると共に、行動手順について修正を加えて「知的障害者の生活支援ハンドブック」としてまとめた。ドラフト版の行動手順（表１）からの変更点は次の通りである。

・朝食場面の食事の次に新たな行動手順として「服薬」を追加
・排泄場面の排泄/排尿に「女性の生理」を追加
・入浴場面の脱衣に「着替えの準備」を追加

また、朝食場面の調理に関する工夫事例については、軽食のような簡単な調理を支援する工夫事例と、より高度な調理（複雑な手順や加熱調理など）を支援する工夫事例に分けて整理した。

また、支援の工夫事例と併せて、利用可能な福祉機器や一般的な機器についても掲載することとした。

4.2　工夫事例を抽出した参考文献

工夫事例の抽出のために調査した参考文献数は20となった。これらは海外文献を翻訳したものや特別支援学校の研究紀要など、支援場面や対象とする読者といった背景が異なっている。今回取り上げた参考文献の概要は次の通りである。

⑴,⑵「自閉症児のための絵で見る構造化[2)]」「同パート２[3)]」：自閉症児の生活する学校や職場、家庭といった場面を対象として、TEACCHプログラムによる構造化（ワークシステムや空間の単目的化のための工夫など）の具体的な事例を、豊富なイラストを中心に紹介している。文献２から10例、文献３から12例の工夫事例を引用した。

⑶「知的障害のある人への配慮[4)]」：ノルウェーの非営利研究組織SINTEFが作成したハンドブック。知的障害者が暮らしの中で支援機器を使うためのヒントを紹介している。気候や生活習慣など、必ずしも日本とマッチしない部分もあるが、朝、仕事／学校が終わってから、余暇、公共の場に分けて紹介している。なお、参考文献７が邦訳している。本書から９例の工夫事例を引用した。

⑷「発達障害のある子とお母さん・先生の思いっきり支援ツール[5)]」：発達障害のある子どもを持つ家族を想定し、支援を始めるためのアセスメントシートと、具体的な支援例を紹介している。本書から６例の工夫事例を引用した。

⑸「知的障害者とその家族のための住まいや暮らしの工夫の事例集[6)]」：排泄や入浴、食事場面など、在宅での困難に対して、家族でできる工夫や住宅改修といった環境調整を紹介している。本書から11例の工夫事例を引用した。

⑹「知的障害者の自立生活を支援するセルフプログラムに関する調査・研究 調査研究報告書[7)]」：知的障害者当事者、知的障害者の保護者、支援者（教員、施設職員など）に対し、生活の様々な場面で感じている不便さと解消のための具体的工夫についてアンケート調査したもの。また、参考文献４の邦訳が掲載されている。本書のアンケート調査結果から22例の工夫事例を引用した。

⑺「スウェーデンの知的障害者[8)]」：スウェーデンの知的障害者の歴史と現状、知的障害者へのアプローチを紹介している。トイレや風呂、台所、食事、時間の理解などに対する様々な工夫を箇条書きで記している。本書から19例の工夫事例を引用した。

⑻「重度知的障害のある人と知的援助機器[9)]」：スウェーデンにおける重度知的障害のある人に対する知的援助機器による自立支援という視点で、実験的研究活動やそこで用いたアセスメントシートなどを紹介している。本書から１例の工夫事例を引用した。

⑼「知的障害・自閉症の方への地域生活支援ガイド[10)]」：障害者ケアマネジメント従事者を対象に、生活支援アセスメントから生活支援プランを考えるアプローチを紹介している。本書のアセスメントシートを工夫事例の整理の参考としながら、３例の工夫事例を引用した。

⑽「青年期自閉症へのサポート[11)]」：青年期自閉症の人の就労支援や学校卒業後の居住支援、余暇支援、ライフプランの支援において、TEACCHプログラムによる構造化手法を多くの事例を用いて紹介している。本書から３例の工夫事例を引用した。

⑾「知的障害のある人のためのバリアフリーデザイン[12)]」：知的障害のある人たちの多く利用する移動空間や建築空間において生じているバリアに対し、環境デザインの立場からそれらを克服するための工夫や考え方を示している。また、あわせてスウェーデンの福祉施設での取り組みについても紹介している。本書から４例の工夫事例を引用した。

⑿「発達障害のある子の困り感に寄り添う支援[13)]」：通常の学級に学ぶLD、ADHD、アスペルガー症候群などの発達障害のある子どもたちが学校での生活や学習で抱く困り感と、特別支援教育における具体的な支援の手立てを紹介している。本書から２例の工夫事例を引用した。

⒀「特別支援教育におけるコミュニケーション支援[14)]」：特別支援教育の中で、AT（支援技術）やAAC（拡大代替コミュニケーション）、ICT（情報通信技術）などを活用した多くの実践を報告している。スイッチの改造やインターネットの活用など、機器の工夫に関する紹介が多い。本書から２例の工夫事例を引用した。

⒁「コミュニケーション支援とバリアフリー[15)]」：知的障害や自閉症の障害のある人がコミュニケーションできるよう、絵カードによるコミュニケーションを提案し、地域での活用実践を報告している。本書から１例の工夫事例を引用した。

⒂「鳴門教育大学附属特別支援学校研究紀要41[16)]」：鳴門教育大学附属特別支援学校におい

て、「社会性を育むための授業づくり～自立活動を主とした授業研究をとおして～」をテーマに平成21年度から２年間研究に取り組んだ成果を報告している。本書から１例の工夫事例を引用した。

⑯「スウェーデン発・知的障害のある人の生活支援ハンドブック[17]」：軽度の知的障害のある人のグループホームやデイサービスセンターで働く人の教材を主として作られたものである。理論や実践に加えて、アセスメント時のインタビュー・評価・分析を行う際に利用する記入様式（障害者本人が利用できるようにピクトグラムが用いられている）も用意されている。本書から10例の工夫事例を引用した。

⑰「特別支援教育におけるATを活用したコミュニケーション支援[18]」：参考文献14の改訂版。前の版から発達障害や視覚障害、聴覚障害への支援機器を拡充し、特別支援教育における全ての障害のある子どもたちへのコミュニケーション支援について事例を中心に紹介している。本書から１例の工夫事例を引用した。

⑱「自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア[19]」：自閉症や知的障害をもつ人の家庭や学校での支援方法と機器について、失敗事例も含めて読み物的に紹介している。本書から１例の工夫事例を引用した。

⑲「気づきとできるから始めるフレームワークを活用した自閉症支援[20]」：自閉症支援をスタートし、続けるためのワークブックというコンセプトで作成している。障害特性シートや個人情報シート、構造化支援シートなど、アセスメントや支援計画を立てる上で利用できるワークシートと課題例を紹介している。本書から１例の工夫事例を引用した。

⑳「自閉症支援のスタンダードVer.1[21]」：施設や学校で青年期・成人期の自閉症の支援に携わっている現場スタッフの横断的なネットワークとして活動している自閉症eサービスが支援現場のテキストとして制作したものである。各年代別の支援の取り組み方や余暇・地域活動、就労支援などの事例を紹介している。本書から３例の工夫事例を引用した。

4.3　知的障害者の生活支援ハンドブック

アンケート調査、聞き取り調査で得られた支援の工夫事例、および昨年度に引き続き実施した文献調査で得られた工夫事例を整理した結果、機器の工夫54例、環境調整45例、人的な配慮46例、製品例17例、表紙や目次などを含めて全28ページとなった。また、一般公開して情報発信することを想定して、本文中のイラスト110点を新たに描き起こした（イラスト担当：粟井直美氏）。制作したハンドブックの表紙および本文の一部を図２、図３に示す。

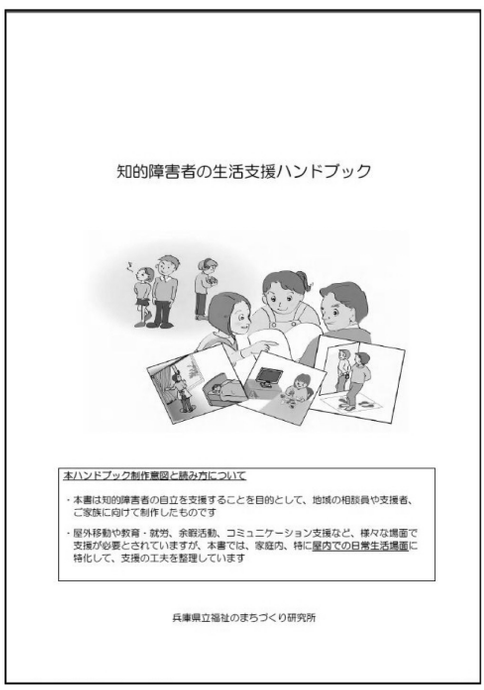


図２　ハンドブック（表紙）
Fig. 2　Handbook （Cover）

図３　ハンドブック（本文）
Fig. 3　Handbook （Main text）

本書の構成として、朝起きてから夜寝るまでの生活場面の各行動手順に従って支援の工夫事例を整理し、１ページあたり１～３つの行動手順を取り上げている。特に、機器の工夫と環境調整については、イラストと文章による説明を１セットとして枠で囲み、グラフィカルに配置することで一覧性が高まるように配慮した。また、本書をきっかけにさらに詳しい情報を知ることができるように、巻末に参考文献を表記することとした。

５　おわりに

本研究では、文献調査やアンケート調査、聞き取り調査を元に、障害者ケアマネジメント従事者向けのアセスメント項目を参考に、知的障害者の「朝起きてから夜寝るまで」の生活を支援するハンドブックを制作した。本書による情報発信は知的障害者の自立の一助となり、支援者にとっても「考えるきっかけ」や「気づき」を促すことができる。また、支援の工夫事例の整理に用いたフォーマットを利用すると共に、今回制作に協力いただいた各機関との連携をはかることにより、コミュニケーション支援や屋外移動、社会参加、余暇活動といった他の場面での情報発信への展開もできるものと考えられる。

謝　辞

本研究を進めるにあたりご協力いただいた、社会福祉法人宝塚さざんか福祉会、特例社団法人宝塚市手をつなぐ育成会、特定非営利活動法人チャレンジひがしなだ、公益財団法人兵庫県手をつなぐ育成会の皆さまに厚く謝意を表します。

また、ハンドブックを制作するにあたり、多くの示唆をいただいた流通科学大学藤本次郎教授、神戸学院大学内原正一氏、ならびにハンドブックのイラスト制作を担当いただいた粟井直美氏に厚く謝意を表します。

参考文献

１）内閣府、“平成23年度版障害者白書”、佐伯印刷、2011
２）佐々木正美、宮原一郎、“自閉症児のための絵で見る構造化”、学習研究社、2004
３）佐々木正美、宮原一郎、“自閉症児のための絵で見る構造化パート２”、学習研究社、2006
４）ノルウェー・SINTEF、“知的障害のある人々への配慮～機能障害のための専門的な試みへの助言”（文献７において邦訳されている）、1989
５）武蔵博文、高畑庄蔵、“発達障害のある子とお母さん・先生のための思いっきり支援ツール”、エンパワメント研究所、2006
６）京都府立大学人間環境学部福祉空間研究室、日本自閉症協会京都支部、京都手をつなぐ育成会、“知的障害者とその家族のための住まいや暮らし方の工夫の事例集”、2006
７）認知障害支援プロジェクツ、“知的障害者の自立生活を支援するセルフガイドプログラムに関する調査・研究調査研究報告書”、平成18年度㈶テクノエイド協会福祉用具普及促進助成事業、2007
８）河本佳子、“スウェーデンの知的障害者　その生活と対応策”、新評論、2006
９）グンネル・ヴィンルンド著、尾添和子訳、吉川かおり監修、“重度知的障害のある人と知的援助機器　～自立の原点を探る”、大揚社、2009
10）門田光司、桑園英俊、柳沢享、箱崎孝二、“知的障害・自閉症の方への地域生活支援ガイド　～食事、身だしなみから、外出の支援まで”、中央法規、2006
11）佐々木正美監修、梅永雄二編著、志賀利一、中山清司、西尾保暢著、“青年期自閉症へのサポート　～青年・成人期のTEACCH実践”、岩崎学術出版社、2004
12）二井るり子、大原一興、小尾隆一、石田祥代、“知的障害のある人のためのバリアフリーデザイン”、彰国社、2004
13）佐藤曉、“発達障害のある子の困り感に寄り添う支援”、学習研究社、2004
14）特別支援教育におけるコミュニケーション支援編集委員会編著、“特別支援教育におけるコミュニケーション支援　～ AACから情報教育まで”、ジアース教育新社、2005
15）全国知的障害養護学校長会編著、“コミュニケーション支援とバリアフリー”、ジアース教育新社、2005
16）鳴門教育大学、鳴門教育大学附属特別支援学校、“研究紀要41　社会性を育むための授業づくり～自立生活を主とした授業研究をとおして”、2011
17）E.リンストローム、B.ヴェンベーリア著、田代幹康、C.ロボス訳著、“スウェーデン発・知的障害のある人の生活支援ハンドブック”、ミネルバ出版、2011
18）金森克浩、“特別支援教育におけるATを活用したコミュニケーション支援”、ジアース教育新社、2010
19）坂井聡、“自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア”、エンパワメント研究所、2002
20）水野敦之、“気づきとできるから始めるフレームワークを活用した自閉症支援”、エンパワメント研究所、2011
21）自閉症eサービス編、“自閉症支援のスタンダードVer.1”、2010